麗和会うらわ

第９号

平成28年10月１日発行

浦和麗和会会報

発　行・浦和麗和会
会長　岩渕　均

印　刷・関東図書株式会社

三兎を追う

浦和麗和会会長　岩渕　均

「二兎追うものは一兎も得ず」は誰でも知っている有名なことわざだ。多くの場合にこの諺があてはまるだろうが、私が20年前に浦高のＰＴＡをしていた時に次のような言葉を聞いていた。「二兎追うものは一兎も得ず。しかしながら、三兎を追うものは三兎を得る」。浦高生はそれくらい能力があるのでいくつかの目標を立ててそれを達成せよ、という意味だ。

このことを書物にされたのが関根郁夫前校長（現埼玉県教育長）だ。浦高生は、授業、学校行事、クラブ活動の三分野で全力を尽くし、目標を達成する、と書物の中で述べられている。

それでは我々の同窓会に目を向けて「兎」を追いかけてみよう。同窓会の目的は何だろう。誰でも「会員同士の親睦」であると答えるだろう。これは正しい。しかし私は会員同士だけの会合（ゴルフや飲み会など）だけでは何となく物足りなく感じる。会員同士の親睦をしながら、時にはもう少し広い世界と交流し、社会に対して貢献することができないかと。すると二番目の目的は「社会貢献」ということになる。「浦高100年の森」事業は、寄居町に対しても大きく言えば地球環境にも影響を与える社会貢献事業といえるだろう。その意味で今年の春に「浦高100年の森」に行くことを提案したのだ。次回は、実際に身体を使って汗を流して社会貢献することを提案していきたい。

「会員同士の親睦」と「社会貢献」。この二つがあれば団体は活性化する。「しかしながら」三匹の兎が必要だ。これを探そう。するとこれが見つかった。「参加するメリット」だ。勿論、先の二つも参加するメリットには違いない。しかし、ここでいう「参加するメリット」はもう少し実利的なものだ。一番具体的なことは、「商売に繋がること」だ。同窓会に出席する会員の中には現役で仕事をされている方も沢山いる。いろいろな事業をされているのだから、お互いにビジネスに活かすことは可能だろう。次に、趣味の世界だ。ゴルフをやる人は多い。上手な人を手本として技術アップを図る。俳句の同好会もある。俳句を作って人生を豊かにする。これまでやったことのないことを始めると世界が広がる。

これで同窓会にも三兎ができた。「会員同士の親睦」、「社会貢献」、「参加するメリット」。

浦和麗和会はこの三兎を追いかけていきたい。皆様のご協力をお願い致します。

題字・尾崎猛記（高51）
編集・星野晃輝（高24）、池田　進（高25）

第20回総会

平成27年11月21日(土)
浦和ロイヤルパインズホテル
出席者　40名

石津　賢治 氏

来賓として、杉山剛士浦和高校校長をはじめ、今村正道大宮浦高会会長（高13）、鴨田博司与野浦高会会長（高15）、野辺博東京浦高会会長（高24）に臨席いただいた。

恒例の講演会は、講師に前北本市長の石津賢治氏（高35）を迎え、「北本市の開発戦略～消滅可能性都市の12年間の取り組み～」というテーマで行われた。

同氏は１９８９年東京大学法学部卒業、１９９１年から１９９９年の２期８年北本市議会議員を経て、２００３年から２００５年の３期12年北本市長として市政に取り組んだ。若き政治家として地方行政に関わった経験と手腕は今後の政治活動に活かされるものであろう。２０１６年４月、戸田市副市長に就任した。

その後の懇親会には、演歌歌手のアトラクションもあり和やかな歓談の場となった。最後は全員で校歌斉唱、滞りなく閉会となった。

（事務局）

春のバス旅行　浦高百年の森に出会う

4月10日熊谷駅前に19名の有志が集合した。これまで行けそうで行けなかった「浦高百年の森」にやっとたどり着くことができるのだ。おりしも桜が満開の頃、遠くの山間に見える桜が漂う浮雲のように過ぎていく。

山道を登った先に建つ山小屋は数人が泊まれる程度の平屋建てであるが、周囲の風景の中にしっくり溶け込んでいる。何年もの間、多くの方々が手入れを行い維持してきた様子がうかがえる。この森は浦和高校に関わる全ての人のためにあるのだと感じた。この場所に立ったということがまさに百年の時間を一瞬に味わったようなものなのか。

「浦高百年の森」の山小屋前で集合写真

さて、和銅鉱泉での昼食の後は、鉢形城公園の散策と鉢形城歴史館の見学となった。城跡は昭和7年に国指定史跡となり、昔のよすがを残している。この地は交通の要衝にあたり、重要拠点として有力な大名が統治していた。上杉氏や北条氏、当時の権力者たちはここで何を思い行動していたのか、空想は膨らむ。

今回の日帰りバスの旅（現地集合・解散）は約6時間の小旅行であったが、充実した内容だったと思う。参加者の感想もおおむね好評。「旅は道連れ世は情け」ということわざがあるように、ほんの短い時間であったが、浦高OB同志という絆のもとに同じ時間をすごせたことに意味があった。この日この時間に集まったことが、まさに百年の森が呼び寄せたささやかな奇跡なのかもしれない。

――・――・――・――

鉢形城（跡）

鉢形城は、深沢川が荒川に合流する付近の両河川が谷を刻む断崖上の天然の要害に立地された城。築城したのは関東管領山内上杉氏の家臣である長尾景春と伝えられている。その後、小田原の後北条氏時代に北条氏邦（1541―97）によって整備拡張され、後北条氏の上野国支配の拠点となった。1590年、豊臣秀吉による小田原征伐が始まり、後北条氏滅亡とともに廃城となった。

山小屋全景

関東地方に所在する戦国時代の城郭としては比較的きれいに残された城の一つといわれる。1932年（昭和7年）に「鉢形城跡」として国の史跡に指定された。1984年（昭和59年）からは寄居町による保存事業が開始された。現在は鉢形城公園として整備され、園内にはガイダンス施設である鉢形城歴史館が設置されている。

（Wikipediaより引用）

鉢形城公園の外曲輪を歩く

浦中と浦高の間（はざま）に生きて
―『ハモニカ長屋の頃』を読む―

星野　和央（高4）

先日（9月10日）、浦高文化祭を見ての帰り、北浦和駅のコンコースで「北浦和周辺の今と昔」という写真展を覗いた。

駅開業80周年記念の催しで、建設中の駅舎や平和通りの様子とともに、昭和12～18年頃に描かれた浦中生の絵や駅舎から出入りする浦高生、そして第1回湘南戦など、懐かしい写真がいっぱい飾られていた。全体で50余枚のうち40枚ほどが浦高同窓会から提供したものという。駅開業は昭和11年9月1日で、浦高の領家移転が昭和12年9月22日であるから、その歩みがちょうど重なり合うわけだ。かつての浦和町に市制が敷かれたのが昭和9年2月11日……、と思う浮かべるうちに、自分自身の浦中浦高時代へと跳んでしまった。

＊　＊　＊

私は「浦高4回卒」となっている。この「4回卒」がクセモノで、昭和21年4月、旧制県立浦和中学校の生徒として入学し、昭和23年4月、県立浦和高等学校の発足と同時に「同校併設浦和中学校」に編入、したがって名称は「中」から「高」に変わるも、6年間を同じ学び舎で同じ教師に接して、同じ仲間とともに昭和27年3月、新制浦和高を卒業した。まさに中高一貫教育を体験した数少ない学年である。（高1から高3の先輩も同様である）。しかも、入学した翌年から3年間は下級生がひとりも入って来ないという不思議な同期であった。この仕組みを言葉（あるいは文章）で説明しても理解されず、図解して初めてうなずく者がいる有様である。

この複雑な6年間で、はれて浦高一年生に進級した時の担任が田中一（かず）先生で「お天気」なる綽名をさしあげていた。その時の気分によって、言動が変わるからなのだろう。だが名門サッカー部の監督でもある。生徒の私に対する第一声「三室からよく浦高に入れたな、優秀だよ！」――いまだに揶揄されている心境だ。その田中先生のお住まいがハモニカ長屋であった。

じつは私が浦高を卒業して20年ほど過ぎた時、恩師の田中先生から毎日新聞出版局に努めている長男を同業の誼みだからと紹介していただいていたのであった。

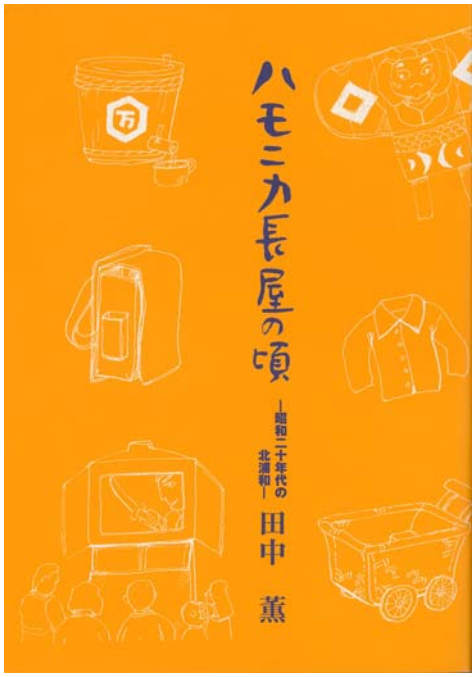
＊　＊　＊

『ハモニカ長屋の頃』という書籍の登場である。執筆された田中薫氏（高11）は、なんと田中先生のご長男、編集したのが私で、出版したのはさきたま出版会―という因縁の本。

ハモニカ長屋は、戦後の浦高で名物の一つである。現在の野球場の南西部分（野球でいう右中間）にあった建物（4軒長屋、2棟）で、昭和33年頃に取り壊されるまで浦高の教職員住宅であった。一塁側の方から眺めると、長屋の北側の窓が左から順に八つきれいに並んで見えたので、私たちは略して「ハモニカ長屋」と呼んでいた。その周囲はサツマイモ畑になっていた。放課後、野球部員の練習で外野フライでも打つと、ボールが屋根に当ってしまうご迷惑もおかけしていたようだ。田中先生が浦中浦高に在職されたのは、昭和17～27年の10年間であった。

この本は、著者である田中薫氏が昭和20年秋から北浦和で過ごし、中学生になるまでの7年間、北浦和駅を中心とした領家周辺などの様子を描き、ハモニカ長屋で家族と暮らした生活記録となっている。

〝昭和20年代の北浦和〟を綴った本書を読み深めるにつれ、領家に移転してからの背景を理解する恰好の内容として麗和会の諸兄にお薦めしたい。北浦和駅開業に先んじる昭和9年生れの私も、同じ時代を生きてきたひとりの古老になってしまった。



ハモニカ長屋のイラストはP6を参照

古代から現代まで、日韓関係を学ぶ旅

高橋　秀明（高27）

8月17日から8日間をかけて、壱岐・対馬・韓国を周ってきた。

小野晋也元衆議院議員が組んだ「古代から現代までの日韓関係を学ぶ旅」に参加したもの。訪問箇所は46カ所、記念館を含む博物館等での学術員による説明・聞き取りは12カ所、経路は、博多港→壱岐→対馬→釜山→晋洲→順天→木浦→南原→大邱→慶洲→蔚山→釜山→博多港。誤解を承知で「任那から西へ百済をぬけて東に新羅に至るコース」日韓交流の道であり、過去多くの戦乱の舞台となった国境地帯である。山川の世界史図録を持ちながら舟、陸路バス、朝昼晩に各地のマッコリ酒品評の旅であった。

今回の旅の目的は2つ。①2004年5月以来12年3カ月ぶりの訪韓、変貌の様子を知ること。ソウル並びにソウル近郊の自治体には何度となくお邪魔していた。②韓国南部は実質初の訪問、気候風土・市民の生活ぶりや日本に対する見方などを尋ねてみたかった。

結論から言えば、①発展には驚いた。この長丁場を移動できたのは、1988年のオリンピックに向け整備された「オリンピック道路」のおかげ。また街の中心部は地方都市でも高層住宅に変わり昔日の家屋は順天ドラマ撮影所にあるのみ。博物館や公共施設は十分空間がとられるなどインフラ整備は進んでいた。②韓半島南部は緑豊かで地味の肥えた地域であった。地理的な「氷期の日本海は、海面が130m下がり対馬と半島を分かつ海峡はおそらく幅2、3kmまで狭まっていた。黄河の河口は五島列島と済州島の中間付近で2万年前ここに流れ込んだ黄河の水は日本海の淡水化を引き起こした」（「地球の履歴書」大河内直彦著、新潮選書刊）と実感できた。

木浦市では孤児を引き取った「共生園」、慶州市では日系婦人保護施設「慶州ナザレ園」も訪問した。特に後者はキリスト者の献身的な努力で運営されている。21名の国籍のない日本人の老婦人たちと「ふるさと」や「赤とんぼ」を歌った。涙ぐむ訪問者に「あなたたちは泣かなくてもいいのよ。私たちは幸せだから」と、今を知るために訪問した韓国だが、何かをしなくてはならないと思った。

陸前・三陸、震災から5年後の夏

池田　進（高25）

浦和美園駅から夜行バスに乗ると、岩手県遠野市で朝を迎えた。ここから4日間の一人旅が始まる。40数年ぶり、学生時代以来の遠野は民話のふるさと、懐かしい佇まいは変わっていなかった。本当はここの市立図書館に終日こもって過ごしたいのだが、その日の内に釜石に移動した。

この旅の目的は釜石から大船渡、そして陸前高田から気仙沼を見ることである。東日本大震災から5年が経ち、どんな状況になっているのかを見たかった。津波で大きな被害を受けたところはどうなっているのか？住民の方々の生活や意識はどうなっているのだろうか？しかし、旅行者が理解できるものは限られている。最も大きな被害を受けた陸前高田の「奇跡の一本松」が悲しげに立っている姿が印象的で、これがすべてを語っていた。もとに戻るには多くの時間が必要だと感じた。

実は昨年の4月から地元自治会で防災部長を任されており、実務的に関わるにつれて、自分の中の防災意識が薄いということに気が付いていた。埼玉県には津波は来ないよ、さいたま市には活断層はないではないか。楽天的な気持ちとは裏腹に、この漠然とした不安はなんなのだろうか。もしや想定外の災害がくるやもしれない。

陸前三陸ではどの町や村も祭りの季節で、揃いのハッピを着、掛け声を高らかに、神輿を担ぎ、山車を引いていた。波にさらわれた建物・跡地の横を、地区名を立て、飾り付けた山車の周りに集まる人は皆、笑顔だ。祭りの日には都会に出た若者も戻り、老人も子供も一緒になって山車を引く。「何が楽しいかって、皆が繋がっているからうれしいのさ。」今の悲しみや将来の不安があるにせよ、つながっていることで生きている実感がある。繋がっているから希望があるのだろう。夏が過ぎるのも速い。

熊本地震に対する義捐金

浦和麗和会は、四月十四日に発生した熊本地震に対し、義捐金を九州浦中浦高会に送金しました。

この度、そのお礼状が届きましたので、お知らせさせて頂きます。

九州浦中浦高会　山崎俊介様

「遅くなりましたが、7月3日（日）に、草刈伸之氏（高34、九州ブランド社長　鳥栖市在住）と一緒に浦和麗和会から預かっていた義捐金（50、000円）を、阿蘇神社の倒壊した拝殿や楼門等の再建費用としてお納めしてきました。

（中略）

熊本や阿蘇地方ではまた、余震がおさまっておりません。

道路や橋、鉄道、土砂災害の現場などの復旧工事もまだまだです。

観光施設や旅館も、またまた昔の賑わいとはなっていません。

しかし、被災された皆さんは「頑張れ熊本」を合言葉に頑張っておられます。

最後になりましたが、ご支援いただいた会員の皆様にお礼申し上げます。

よろしくお伝えください。

阿蘇神社にて（山崎会長）

……

還暦からのサッカー

永躰義博（高25）

昨年還暦を過ぎてサッカーを始めました。

浦和レッズの第一ステージ優勝に沸く居酒屋で、サポーター仲間に「俺もサッカーやりたいんだけど、どこかないかな」と話したことがきっかけです。彼は浦和市立高校サッカー部のOBチームで現在もプレーしているのですが、彼のチームはレベルが高すぎます。その時偶然合席した彼の友人が「うちでやらないか？」と声をかけてくれたのです。

ところがこのチーム（与野FSC）も高校や大学のサッカー経験者がそのまま社会人リーグを続けてシニアリーグに参加した方々ばかりで、未経験者が気軽にサッカーを楽しむというレベルではありませんでした。ためしにいちど練習試合に出していただいた後、チームの先輩から駒場で練習会があると聞き参加することにしました。

練習会（浦和スポーツクラブ）は毎週木曜日午後1時から駒場スタジアムサブグランドで所属クラブに関係なく20人位が集まって合同練習を行っています。指導者のもとで入念なストレッチに始まり、コーン等を使った体幹練習、パスやトラップなどの基礎練習、さまざまなフォーメーションでのシュート練習を行い、最後はミニゲームで仕上げます。2時間弱の練習時間ですが、密度は結構濃いと思います。最初の頃は練習中に息が切れ、筋肉と関節の疲労が3日くらい抜けないほどでした。

所属チームでは昨年、練習生扱いで練習試合にしか出られませんでしたが、今年から埼玉県シニア連盟と日本サッカー協会に正式登録され、公式戦にも出場可能となりました。始めて1年後の今、体重もベストに戻り、チームや練習会を通じて新しい仲間もできました。思いきってサッカーを始めてよかったと思います。

浦和スポーツクラブは25年前に、様々なスポーツを各年代で楽しむことを目的として設立された欧州型クラブで、初代理事長は倉持先生でした。先生には在学中に体育の時間などで、サッカーの楽しさを教えてもらい、現在は先生の創立されたクラブでサッカーを楽しんでいます。浦和という街とサッカーが結んでくれたご縁を感じています。

なお、倉持先生は今年4月に永眠されました。ご冥福をお祈りいたします。

部会だより

■俳句同好会「やぶれ傘」のご案内

俳句結社やぶれ傘は高校十回卒で元俳句朝日編集長、現在「ウェップ俳句通信」編集長の大崎紀夫先生が主宰です。

浦和駅東口駅前のパルコ10階、コムナーレ会議室にて句会（教室）が左記開催されています。浦和麗和会の皆様には奮ってご参加いただければと思います。

＊うらら会　毎月第一火曜日　午後6時より

＊なごみ会　毎月第一金曜日　午後6時より

＊ぎんなん会　毎月第一月曜日と隔月第一水曜日　午後7時より

参加にあたり、当季雑詠の句を五句、持参いただければいつでも可能です。見学希望だけでも歓迎いたします。参加費は千五百円、希望の方は電話にて問合せ願います。

希望者には結社誌「やぶれ傘」を送付いたします。

瀬島　孟（うらら会世話人）

☎048―862―2757

■ゴルフ同好会開催のご案内

この度、浦和麗和会ゴルフ同好会ではゴルフコンペを企画させていただきました。

日時　平成28年11月5日（土）
午前7時18分スタート
集合　午前7時

場所　リーバーサイドフェニックスゴルフクラブ
埼玉県上尾市平方2606―1

募集人員　8名

同封のお知らせにて**十月八日**までにお申し込み下さい。

※定員に達し次第締め切らせていただきます。

■麻雀同好会メンバー募集

麻雀を通じて会員の親睦を図るとともに、麻雀というゲームの面白さを楽しむという趣旨のもと、メンバーを募集中です。基本的には賭けないノーレートの麻雀ですが、競技性が高く、記録を競う麻雀の楽しさに新たな発見があると思います。

4人で麻雀をおこなうためには、時間、場所、ルールなどの調整が必要です。いろいろと工夫を考えていますので、ぜひ気軽に申込みください。もう何年もやってない方、大歓迎です。

連絡先　世話人　池田　進
携帯　090―3918―6492

事務局より

■第二一回浦和麗和会総会のご案内

日時　平成28年11月26日（土）
開会　午後5時

会場　浦和ワシントンホテル4階
プリムローズ

総会　午後5時～午後5時30分

講演会　午後5時40分～午後6時30分

演題　「三菱地所による東京駅前（常盤橋街区）再開発プロジェクト」

講師　木村惠司氏（三菱地所取締役会長・浦和高校同窓会会長）

懇親会　午後6時40分～午後8時30分

※総会出欠の返信は11月12日（土）までに同封用紙にてFAXで、FAXを使用されない方はEメールまたは電話での返信をお願いします。

■会員の皆様にお願い

平成28年度（28年10月～29年9月）分の会費を納入下さいますようにお願いします。

また、同封の入会申込書で会員のお誘いをお願い致します。

■浦和麗和会入会のご案内

浦和麗和会とは、埼玉県立浦和高等学校（旧制浦中含む）に在籍した旧浦和市（さいたま市）出身者ならびに現在旧浦和市に在住、在職する人たちの親睦団体です。

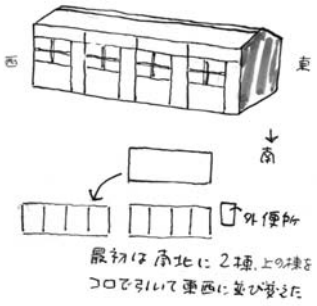
浦和麗和会は、人生の後半における一服の清涼剤であり、心のオアシスです。メンバーは多士多才で各方面のスペシャリストがおり、問題解決能力のある集団です。一度、会合に出席していただければ、気のおけない仲間との心地よい一時になるはずです。

手続きは簡単です。本日、同封した申込書にご記入の上、ゆうちょ銀行（郵便局）から年会費の2000円をお振込いただくだけです。

振込番号　00190―8―101524

加入者名　浦和麗和会事務局

主な活動内容　総会（十一月）、春の研修会（四月）、同好会として、囲碁を楽しむ会、自分史を書こう会、俳句会やぶれ傘、テニス同好会、ゴルフ同好会等、また新しく麻雀同好会を立ち上げました。



ハモニカ長屋

浦和麗和会事務局
さいたま市浦和区
仲町3―8―1―101
央浦印刷社内
電話　090―3069―5922
FAX　048―831―0011
幹事長　星野　晃輝（高24）